

## 日本語検定で言葉の壁を取り除く

—学習過程を振り返り、記憶、習得、関連づけるために日本語検定は効果的—

埼玉大学教育学部附属小学校 副校長 齋藤博伸氏



「勤労をいとわない自主的精神の旺盛な、人間性豊かなよき社会人を育成する」という教育目標の下、平成20年から全学年で日本語検定を実施しています。齋藤副校長に、教育の現場での取り組みをはじめ、“なぜ、小学生のうちに日本語力を育まなければならないのか”、その理由と効果を伺いました。



齋藤副校長は、東京学芸大学卒業後、埼玉県内の公立小学校の教諭を8年間務め、2006年より埼玉大学教育学部附属小学校へ。2016年、副校長に就任されました。

### 将来も学び続けられる力を育てて伸ばす

人が生きていく上で力となるのは、バランスのとれた「知、徳、体」。埼玉大学教育学部附属小学校の教育目標は、「知、徳、体」の育成を前提に掲げられている。

「わが校の教育目標は現代にも通じる普遍的な考え方で、本校らしさの象徴です。小学校は6年で終わりですが、子供たちはその先も学び続けます。6年生がゴールではありません。小学校を卒業し、中学生、高校生、社会人になっても学び続けられる、その資質や能力を育てていくことが、結果として“よき社会人を育成する”ことに繋がります」

情報は日々更新され、科学技術は著しく発展し、人々の暮らしも変わり続ける中で、10年前に覚えたものが、そのまま通用する時代ではなくなっている。様々な状況に柔軟に対応するためにも、子供たちは常に学び続けなければならない。一方で、学び続けることは、人生を豊かにする側面もある。



「重要なのは、子供たちの興味や関心が高まる学びの機会をつくること。そのために教員は、子供たちが目を輝かせる授業の工夫や、適切な声かけをして、興味・関心の対象を把握する努力をしています。家庭でも同じ。たとえば、宿題をしない子に、“やりなさい！”と命令口調で言うよりも、子供が自ら“よし、やるぞ！”と思わせるように仕向ける。大人が子供の気持ちを思って接すれば、子供の意識も変わります」

埼玉大学教育学部附属小学校では、“自分の子供をどう育てていくか”、保護者の意識も高い。夏休みなど長期休業日には、各家庭で子供に何を学ばせるかを考えて実践している。歴史に興味があれば博物館やお城に連れていく、本好きなら図書館に、工作が得意なら実際に作らせてみる。家庭でも、子供の関心分野を伸ばす環境を作っているのだ。一方、学校側は子供の様子や授業風景を観てもらおう授業参観や保護者会にも最善を尽くしている。保護者の出席率は100%。学校経営や学級経営についても、十分理解してもらえよう丁寧な説明を心がけている。

## 日本語検定で言葉の壁を取り除く

「ありがたいことに、本校の子供たちは、学ぶことに対して意欲が高い。勉強が嫌いという子は、ほとんどいません。なぜなのかと考えると、小学校に入る前から、子供たちの学びに対して、周りの大人たちが真剣に向き合っていたのだと思います。子供がちゃんとできた時には褒める、できるようになるまで目をかける。さらに、小学校に入学したら学校任せではなく、1年生、2年生…と、各学年に合わせて、引き続き見守っていく。家庭の教育力が非常に高いのです」



子供が学びに対して意欲を持つには、満足感や達成感を伴うことが大事。そうして学びが受動的でなくなることで、学びが人生の中で確実に生きてくる。

「子供たちの“面白かった！”、“できた！”、という満足感や達成感を見逃さないようにしています。そうすれば、一人一人の個性を伸ばし、生かすことができます。個性を伸ばす一つとして取り組んでいるのが、表現力や言語力に焦点を当てた日本語検定です。日本語検定を通して日本語を深く知ること、知識も広がります。

また、授業中の思考はもちろん、適切な言葉を使う、自分の知識を表現する、あらゆる場面で日本語は不可欠です。ところが、言葉が出て来ない、言葉が解らない、などの言葉の壁があると、自分の考えを正しく伝えられません。言葉の壁を取り除くためにも、日本語検定は有効です。1～2年生は、擬音語や身振り手振りでも表現し、伝え合うことが多いですが、3年生以上になれば自分の言葉で表現して相手に伝える場が増え、詳細な様子や心情を深く理解し合おうとします。

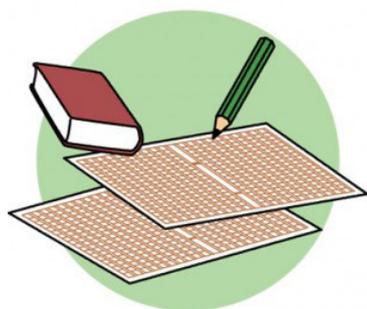
尊敬語や謙譲語などを学んでいけば、目上の人と対話する際に言葉を選んで話すことができますが、言葉に壁がある子供は、話す前に他人と関わることをためらいます。関わりたい気持ちがあっても、“丁寧に話すにはどう話せば良いのだろう？”と委縮してしまう。無理に話そうとして失礼な言い方になり、笑われでもすれば、ますます他人との対話から遠ざかってしまうのです」



日本語を使う、学ぶ機会と捉えて導入した日本語検定だが、今では子供たち自身が知識や技能を測る物差しになっている。自分の得手不得手を自覚し、不得手を改善するために勉強する。日々の学習や生活の中で、日本語力を確実に高めることに繋がっている。

「適切に日本語を使用できるということは、表現力が高いことを示します。日々の授業で感じたことや考えたことを正しく表現できる子は、自分の考えを認識しながら学習過程を振り返ることができる。つまり、学習内容を確実に記憶して習得し、他の事象との関連付けもスムーズにできるようになるので、学力向上につながります」

さらに、受検前には子供どうしの教え合いが生まれ、受検後は“あの尊敬語どう書いた？”など、お互いを成長させる良い仕組みができています。他校ではなかなか見られないであろう場面だが、これも日本語検定の受検がもたらした効果だと言える。



「採点された答案用紙で苦手分野も把握できます。“できなかったら次は頑張ろう！”、“5級に合格したから次は4級を目指そう！”など、次へのモチベーションにも繋がります。なかには、高校卒業レベルの3級を取得した子もいますが、蓄積された日本語力、家庭教育力、言葉に対する研ぎ澄まされた能力など、いろんな側面が結びついて3級レベルの日本語力が定着したと思います。その子にとって、中学生、高校生になっても、日本語は得意だという気持ちを持てるのが、とても大事。1つでも得意分野を持つことは、必ず自分の強みになります」

## 日本語力が高まれば聞く力も高まる

日本語を正しく適切に使うことができる子供は、自分の考えたことを的確に表現できる。一方、自分の思考を言語化できない子供は、知識や理解の定着が難しく、論理的に思考しにくくなる。同時に、対話による聞く力も、日本語力を高めるためには重要だ。

「会話の中で知っている言葉が出たら、後に続く言葉もなんとなく予測できます。予測できれば、話にも興味が湧き、聞こうとする。さらに、聞く力が向上すれば、話す相手の立場に立って理解でき、相手の意志を慮ることもできます。たとえば、相手が怒った口調で話したとします。“何、怒ってるんだよ！”と自分本位に返すのではなく、“相手は何に怒っているのか”と相手の立場に立って考えられます。そうすれば、返す言葉も変わってくるはず。視点移動は、円滑なコミュニケーションの鍵だと思います。

また、聞く力が鍛えられると、会話中の接続詞に着目して聞くようになります。“たとえば”と来れば、前の会話が具体化されるんだろうなと予測できます。聞く力がなければ予測もできず、その後の会話も理解できなくなってしまうです」



## 子供の能力を生かすスタートカリキュラムにも言語感覚が重要

日本語力の強化は、2019年に改訂される小学校の学習指導要領でも着目されている。さらに、大きな取り組みの1つがスタートカリキュラム。幼児期の学びが児童期の学びに円滑に移行できるよう、小学校に入る前の子供たちが持っている能力やできることを教員が把握し、子供たちにその能力を発揮させるカリキュラムだ。体を動かす、物を数える、生き物に親しむ、うがい手洗いをする、などの要素をあえて入学時に実施する。

「子供に応じて、できることはいっぱいあるでしょうから、それをちゃんと見てあげよう、見守ってこうという姿勢です。今までは、ベテランの先生がうまくやっていた部分ですが、それでは、担任によって指導レベルも異なるので、子供にとっては不幸です。ベテランでも中堅でも若い先生でも、どの先生が受け持っても子供たちが今まで培ってきた力を発揮できるようなカリキュラムを作っていくという動きになっています。

ここには言語感覚も含まれます。言葉に興味を持つ、読もうとする、書こうとする。言語感覚は幼児のうちから身につけているので、うまく生かしながら、小学校の各授業で言葉の力として伸ばしていくことが大事です。さらに、言葉や文字に興味を持つ子に活躍の場を与えます。読める、自分の名前が書ける子には、“みんなはまだ習ってないから待っててね”、ではなく、“どう読むの？”、“じょうずに書けるね”というように導いてあげれば、周りの子供たちも自分の名前を書きたい、というような良いきっかけになります」

## 概念形成の土台は日本語力

そして、次期学習指導要領の大きな柱が、学力の三要素（思考力、判断力、表現力）の重要性である。

「いずれも日本語を基にして考え、表現することですから、どの教科においても資質能力を伸ばせます。特に、概念形成は言語化の上に成り立ちますから、国語だけに限らず全教科が対象です。さらに、教員や友達と伝え合ったり、教え合ったりするコミュニケーションの中で、一層深まるものだと思います。そうした学習場面を用意はしていますが、すべての子供たちが最大限の力を発揮するためには、自分の考えを的確に話す、相手の考えを理解して聞く、正確に書く、読み取ることが要求されます。言葉で伝える、会話することは、概念形成の中でも主軸となり得るのです。考える、話す、聞く、を同時に行うことで、自分の知識として定着し、安定的な力となって身に付きます。

また、次期学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びが授業改善のテーマに挙げられています。なかでも、対話的な学びという点では、言葉を介しますから日本語の重要性が問われます。さらなる日本語検定への取組が効果を発揮するのではないかと期待しています。」